

以上に於て國土計畫に對する自分の解釋の概要を盡した。然しその中で自分は「生活計畫」及「地方都市振興」に關する項について尙云ひ度い事を残した。

そしてそれが自分の此の著の主題でもあるので既に二三の方面で發表したそれ等に關する論文を改訂の上加へる事にした。従つて内容に多少の重複ある事は諒せられ度い。

第二部 國土計畫に關する特殊論考

第一章 國土計畫の最終課題たる「生活計畫」

について

第一節 生活計畫

一、生活計畫の要諦

「國土及國土に即する現象を動員し、これを國家その時の最大要請に應ずる様整備構成する國

土計畫」はおよそ一つの國家たる以上當然備へなければならぬ體制であらふ。我が國が世界の
大勢に従ひ「漸く」これを國策として取り上げるに至つたのは、當然とは云ひながら欣快にた
へなす。

事實我が國の過去の「總て」は國土計畫的に見て遺憾の點が多過ぎた。それは平和であり、
自由主義がその任務を誇り得る時代には、容認され得たかも知れないが、今にして渾身の力を
要する時、此の「利己のモザイク」は國、民族、子孫、祖先を賣る態度の外の何ものでもな
す。これは一日も速かに清算されなければならぬ。

たゞ、こゝに問題として深き考慮を要するのは、此の實に世界的の難事であり、これ迄の古
き經驗者たる英米が、その長き努力にも拘はらず「物」にし得なかつた國土計畫が、これを試みる
事さへしなかつたものが我國によつて、一朝にして實施し得るものなりや否やと云ふ事である。
恐らく、此の當然の國家要務が、長くその形を得なかつたのには、夫々の國に夫々の克服し
がたき理由があつての事であらう。又それを「試みんとさへ」しなかつた國家には「試みんと
さへ」せしめなかつた原因があつての事と考へられる。

その容易ならぬ「根本」に省る事なく、これを易々たりと輕斷するは未だしも、これを自己

の安易なる解釋により又八方に最も抵抗なき路を撰びたいとする「實施の僞態」を樂しまんとする時、國土計畫は全く形體に止り、求められる所の實體は逸し去つて、跡をとゞめない事になる恐れがある。

かくの如きは、國家喫緊の要請に報ふべき時に報ひ得ざるのみならず、國民をして國土計畫そのものに失望せしめ再びこれが眞の相にて、顯はれる機會を失はしめんとさへする。國家の不幸危険これに過ぎるはない。

我が國の國土計畫が表面化して未だ半歳を出でない。恐らくそれは健全なる出生の準備をとげつゝあると考へる。

たと然し、それが強力なる實體として實社會に望む前には、何としても幾つかの荆棘歧路を経べき様豫想される。

少くも自分は現下既に、輿論として上下される國土計畫論の中に、その多分なるものを感ずるのである。

(一) 例へば先ず第一に我々は國土計畫の定義を明快にする必要がある事を感じる。

國土計畫は何としても土に關する地域秩序であるべきにかゝはらず、屢々それは計畫經濟乃

至國家計畫の如き上位計畫と混亂されて論じられる。

その結果、それは實在たる國土の實態をはなれ、いたずらに當爲の論に精細となり、具體化を隠せしめる。

(二) 又、國土計畫が國土再編成と國土振興と二つの面を有する事は識らるゝ如くである。

夫々、その國土の情勢により決定されるのであるが、たゞ、後者は政治經濟上の自由主義的な國家にても行ひ得るが、前者は絶對的に強權による統制なくして行ひ難い。

我國現下の國土計畫の重點は、實に此の再編成のそれである。

従つてそれは、自由主義の揚棄なしには遂げ得ないものである様に思へる。

それが果してその様に認識と覺悟を有たれて居るかどうか。恐らく否であらう、然りとせばそれは問題にならない状態である。

(三) 國土の再編成に當つて、先ず着手すべきは大都市の抑制及分散である。

然しそれは次の様な配意なしに實行する事の不可能なものである。

イ、分散抑制を爲すには、當然それ以前に於てその分散抑制が日本の既往の經濟力を減損せしめざる様準備を爲して置く必要がある。

例へばナチスが總てに先き立つて自動車國道を建設してかゝつた様なものである。

ロ、又分散抑制の最效果ある對象は工業である。

然るに此の工業は、これを直ちに農村に投すべきか否かについては大きな疑問がある。

少くもそれは農村の生産力、出生力等を弱める事なく、且、日本の精神力の根元たる農村精神を損ふ様な事があつてはならない。

且又、食糧自給の關係よりして、無限の收容は不可なりと考へられる。

これ等に對しても十二分の考慮が必要である。

(四) 又大都市が特にその工業を主力として分散せんとする時、地方には一際に人口が溢出する。

その時の問題は、それが單に工業その他の産業立地のみに應じ定着するのであつてはならないと云ふ事である。

何となれば、若しそれが單に産業立地のみに従ふならば、再び大都市乃至工業偏倚を來すおそれなしとしないのみならず、かくして結果したる「人口地方」は必ずしも最上の地理的社會形式であるとは限らない。

然るに國家が最必要とするのは此の最後のものたる「最上の社會」なのである。

およそ一つの國家は、かくの如き「最上の社會」によつてのみ健康と教養を兼ねたる國民を保ち、且その國民の精神をして國家に歸一せしめる事が出来るのである。

かくの如き、重要至極なる國土體制をたゞ偶然に待つ如き事は、爲すある國家の方法論ではなす。

むしろ國土計畫はかゝる「社會」を前提として、これの支持力としての工業配置を爲すべきである。

(五) 以上の總ては決して既往の如き分權的行政形態で果し得る事でない。

これ等を完全に遂行する爲には、何としても一切の行政が、渾然として一體を爲し得る様再構成されなければならない。

これ等が如何に取り扱はれて行くのであらうか。

少くも、これ等に何等ふれずしては一步も前進なし難さが日本の國土計畫である筈である。然も現實は、何となくこれを見送らんとする如き形を察知せしめてる。

岐路を誤るのでないかといふことが杞憂に終らん事切望にたへないのである。

よつて自分はこゝに一つの試みに於てはあがあるが、國土計畫最終の課題たる「最上の社會」たる「地方」を「生活の面」に於て如何に構成すべきか一案をのべ、せめて此の方面における基本的な考察を喚起し度いと思ふのである。

x

ちよそ國土計畫にはその國その時の唯一の形式がある。

それは決して他の國の既存のものをそのまま眞似て、よき成果を得べきものでない。然し我々は、我が國の國土計畫要請よりして（國土の再編成、廣義國防國家建設等）獨逸のそれにくの學ぶべきものを發見する。

特に我々は、彼等が國土計畫の要諦として、防空の點よりも、強兵の點よりも、産業の點よりも乃至は獨逸永遠の繁榮の意味よりして賢く健全なる獨逸人の構成する「獨逸的生活」「獨逸的社會」を考へて居る點に首肯せざるを得ないのである。

彼等はこふ云ふ。

「國土計畫は、ドイツのジードルング（定住地計畫）事業に對し洪大なる指導方針を與へる。

此の方針に基いて、我々は各地方に赴き、そこに存在する人間、土地、動植物に關する地方

個有の法則を認識しなければならない。

こゝに我が國土計畫より入つて行くべきものは、任意的に定められた政治的境界による州計畫ではなく、ドイツ國民の夫々の生活地域を認識し且形成する郷土計畫である。」

「建設は人間及家庭を以つてしなければならぬ。その他のもの即ち村落及都市は、たゞこの大工事の外觀に見へる要石に過ぎぬものである。」

「ドイツのジードルング事業は決して石や鋼鐵を構成要素とする建設事業でなく、ドイツ人並にドイツ勞働者及農民の家庭を以つてすると云ふ事である。」「獨逸のジードルング事業」より）

「人間自體の肉體的並精神的性質に對し特別な要求があるもので、而してその特性と云ふものは、或る、特定の地方風土内の人種は其の自然的素質に依つて特別な適應性を現はす事があるものである。」

「職工以外に如何に多くの未婚者や妻子のある既婚者が居着き、定着者となつて工場周囲の何處に如何にして定住するかを考へに入れない様な工場移設計畫は總て不完全なものである。」

「健全な家庭は健全な住居にあつてこそ、初めて生長するのである。

自分の土地に再び土着して住み得る勞働者こそ工業と最緊密に結び付き得るのである。」

「工業材料の出る處又はある處にのみ職場乃至住宅地を一方的に定めたことの惡結果は既に大戰前に見る事が出來たのである。」

「人間は大地からの心の糧を失ひつゝあつたのだと云ふ事を都市の人間は漸くはつきり自覺するに至つたのである併し心の糧は都市へ輸送し得べくもないのである。」

都市民が週末旅行をするが如きは土地と結び付かなくなつた缺陷に對する不可避的な現はれであるが、併し高價な反作用と謂ふべきである。」(工業移設より)

「土地と人との二つの要素は一體となつて一地方の經濟の外的現象形態を決定するのみならず、同時に内的な經濟力生産力をも決定する。」

此の内的な力を出來る限り増進し、その方向を決定し、その進路を誤る事前に防止する事は其の地域の住民に課されたる任務である。

此の任務は單に土地の側からのみ土地の物的所與の合目的々形成によつて解決されるものでもなければ、又單に人の側からのみ人の動員の意識的管理に依てのみ解決されるものでもな
5。

創造的な形成意志を有する者の爲すべき此の任務は寧ろ人的經濟根基と物的經濟根基とを不

斷に同化調和せしめるにある。

考察を進めてゆくと、人と土地の目的中調整と云ふ此の任務は重き性質を有する事が明らかになる。

此の任務は夫々獨自のエネルギーを放射する兩極の調整にある。

人は土地を形成し、土地はその住民を形成する。それ故に、此の動的な現象を認識し、生きた發展經路を正しく把握し且善導する事が問題である。」(中部ドイツ開發計畫の概要「より」)

「アドルフ、ヒットラーは民族協同體なる語を強調して居る。此の語を通じてわが民族の成員たちは、民族協同體の一員たることなくしては個人が何者でもあり得ないこと、また、自然的協同體とは、たゞ、血統、言語、文化を同じくする人達の構成せる團體、すなはち、民族協同體なる事を識るべきである。」

民族協同體なる概念は、一民族の成員が自然的に協同體に結合し、しかも、生活上の全事象に關しては自己をば協同體に結合したものととして感じなければならぬと云ふ事、すなはち自己を民族協同體の一員なりと感じなければならぬと云ふ意味を表はして居る。」

「一民族の運命はその觀念的並に、物質的基調によつて規定せられる。その觀念的基調は次の

三條件に依據する。

(一) 各同胞の民族全體への感情的結合。
(二) 各個人が自主的、獨立的自由なる民族の一成員たらんとする意志、さらにドイツ民族の利益を保護するに必要ないかなる時、いかなる場所においても、あらゆる犠牲を顧慮することなく、この意志を貫徹せんとする決意。

(三) かゝる感情的結合、意志、決意こそ本源的性質の力——固有の力——眞の民族の力を表はすものなることの認識、そしてかくの如き、眞の民族の力はたゞ民族協同のうちにてのみ生成し存続し得る事の認識。」「〔民族協同體の本質〕より」

以上斷章的主張を通じて、我等は正に我國にそのまゝ移し植ゑて可なる生活計畫の指針を見出すのである。

即我等は、これ等の中より次の様なものを選び事が出来る。

- 一、國民をして郷土に定着せしめる事の必要。
- 二、郷土に於ては居住者が自己の存在の尊貴を確認し且そこに成立する隣保社會の價值をも確認し得る事の必要。

三、かくして生じたる隣保的な社會單位を最後に於て「家庭↓聚落↓地方↓國家」の關係にて「全體」に續かしめる事の必要。

四、戰場と文化を郷土的に分布せしめる事の必要。

恐らく、四は一の爲の條件となるのであらふし、二、三は結局一つのものなりとも考へられる。

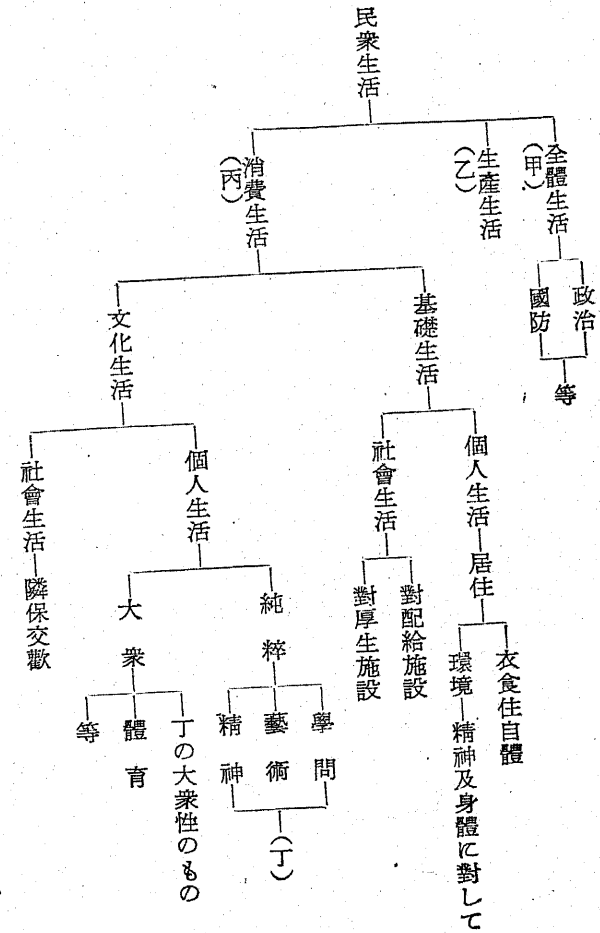
或は又、一は二の爲の條件とも云へる。

結局、これ等の條件は、相互に關聯しつゝ、國民生活を規定するのである。而して此の中で最重要き條件は結局三であると云へる。

恐らく人間は、近隣相結び更にその「結び」を近隣より聚落に、聚落より地方に、地方より國家へと續けてゆく時最人間としての最高能力を發揮し、文化と生産を高め且、單位たる個人自身を最幸福なる状態に置くであらふ。

(その逆に孤立せる時、人間は最貧しく微力であり不幸である。)かくの如き時の綜合表出は決して數學的な「綜和」でなく、化學的な「異質への昇華」である。此れが國民生活の建設要諦でなければならぬ。

第二節 生活自體



よつて今國民生活の條件に應じ構成すべき段取りとなる譯であるが、その前に一應、生活自體の内容につき、吟味して見る必要がある。

生活内容については未だ明快なる學的系列は出來て居ないが、これを便宜日常經驗的に表示すれば前表の様になる。

これは我々の生活の全系列であるが、上述のナチスの精神及我等の強き主張は、此の生活夫々に順位と強弱を附する事である。

即、一般にこれ等の生活は生産に重點を置き、消費はその残滓をあてがはるゝ順位となる。それに對し我々は、あく迄消費生活自體の重要性をあげ、これを首位に置き、生産を従たらしめよと主張する。

勿論さればとて生産を閉却せよと云ふのではなからず、生産はあく迄人類、國家の下部基構である。

消費はこれによつて規定せらるゝ性質のものである事云ふ迄もなからず。

たゞ問題は「一〇」の生産を「九」に減じた爲に「〇」の消費が「一〇」に高まるならばその配意を以つて生産計畫を爲すべしと云ふのである。

尤、その消費生活は零細卑近なる低位のもののみを意味するものではない。それは「消費」と云ふ字義が或はその眞意を没却するおそれがあると思へる高位の人類創造の軸に沿へる高さに迄及ぶ生活である。それあるが爲國家が榮へ國家が強大を爲す「精神」の糧となるべき生活全部の謂なのである。

此等について久山氏の次の論文は大衆娛樂についてのみではあるが自分の主張を云ひ盡してゐる。

娛樂の價値がもつと正當に評價されなければならない。理論的科學的な研究が要求されなければならない。

50.

人間の浪費的享受生活は、その生産的寄與生活に比して著しく社會的に閉却され、多くは私事に屬する問題として放任せられたのである。

殊に娛樂慰安に到つては不當に卑められ、娼婦扱ひにされて殆ど顧みられる所がなかつたが勞働が社會的となり、勞働の問題が益々社會の不可缺の緊要事として國家的に調整を受ける様になつた今、かゝる勞働の

ために、重要な役割をつとめる娛樂慰安の問題ももつと社會的に反省されなくてはならないと思ふ。

娛樂の種類

- 家庭娛樂
- 郷土娛樂
- 貴族娛樂
- 民衆娛樂

娛樂の一つの特徴たる社會性は、先づ娛樂が多くの場合個々人の單獨な享受ではなくて必ず相手又は同輩があると云ふ事にあらはれる。

—大勢が同時に一つの娛樂を歡賞享受すると云ふ事はそれ丈で明に社會的行爲である。

慰安や休養はそれ丈では何等積極的な社會現象とはなり得ない。それは勞働に對して養生的、消極的な生活形式に過ぎない。

然しながらかゝる生活形式を必要とする勞働生活、従つて、社會生活が現實の姿と云ふ事は、それ丈で慰

第一章 國土計畫の最終課題たる「生活計畫」について

安や、休養の持つ社会的な存在理由があるわけである。

ましてかゝる生活形式を埋める實質の最重要な一つとして娯樂が採用され、それが慰安的、養生的な役割を持ち、勞働生活のバランスを保たしめると云ふ事は娯樂の積極性、建設性を雄辯に物語るものである。

x

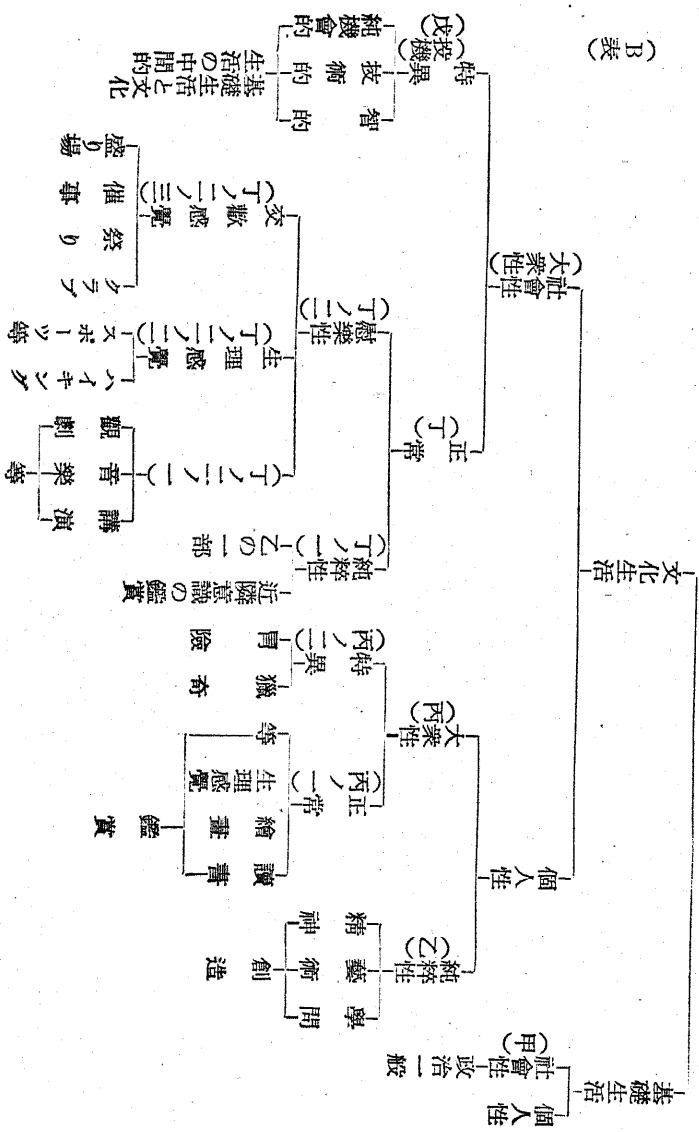
「樂ませつゝ高め、慰めつゝ教へ、害はれたる心身のエネルギーを補給し、明日への生活感情を快感もて鼓舞し生活のバランスを保たしめつゝ民衆を感情的内的に結合してゆく。」

これこそ娯樂の本質的な機能であり、社會性、積極性の眞髓である。かゝる機能を最安易に、また完全に營むものは實に民衆娯樂であり、その本質の中に根ざす特性に他ならないのである。

(民衆娯樂の概念、日本社會學年報第七輯)

然らばその消費生活は如何なる施設と環境を要するか。

先ず施設については次の様なものが考へられる。



(B表)

此の資料に對しては次の様なものがある。

(甲)(乙)(丙ノ一)(丁ノ二ノ一)等の文化生活正系のものに對してはA、B(一第一系)

(乙ノ一)(丁ノ二ノ二)等の中生理感覺を含めるもの及第一系を含めたものにC、D(一第二系)

(丁ノ一)(丁ノ二ノ三)の如き隣保感覺系のものに對してはE、F(一第三系)

(戊ノ一)(丁ノ二ノ二)等の中慰樂に關するものに對してはG、H、I(一第四系)

更に(戊)等の特異性のものに對してはJ(一第五系)

A、社會中心の要素となるもの(ワイスコニンシ大專 ワード氏)

公開講座中心、圖書館支部、美術展覽會、音樂中心、催事中心、映畫館、慰樂中心、職業紹介所、公衆衛生局。

B、獨逸の國文化院構成(Die Reichs Kultur Kammer)

(一九三三年 國文化院法)

國音樂院、國造形美術院、國演劇院、國新聞院、國ラヂオ院、國映畫館

C、K. D. F. 團の内容(改造二十三卷七號、邦正美氏)

運動部

勞働美化部

旅行遊覽部

獨逸國民教養部

催し物部

運動部

屋內運動場

一五、〇〇〇個所

運動競技指南所

一、〇〇〇

屋內綜合運動場

一、〇三五

職場單位クラブ、

一一、〇〇〇

勞働美化部

職場の美化作業

第一章 國土計畫の最終課題たる「生活計畫」について

第二部 國土計畫に關する特殊論考

職場附屬の踊り場 四、三〇〇

映畫映寫場 六、四〇〇

圖書室 四、二〇〇

等

旅行遊覽部

豪華船旅行 汽車遊覽

登山列車 バス旅行

小船旅行 海洋旅行

K、D、F自動車 等

獨逸國民教養部

講演 講義 協同研究會

小研究會 見學 研究調査

研究徒歩旅行 展覽會 移動展覽會

教養の夕べ(職場、都會、農村)

文化探求旅行 等

催し物部

音樂會、舞踊會 映畫

民謡會、民踊會 展覽會

オペラ、オペレット等 見世物

演劇 劇 その他

ヴェリエテ、曲馬類 自動車道路工事場催し物等

混合催し物

D、伊太利下ボラボロ團 (The National Depolavaro Foundation in Italy) 目次

組織

國民下ボラボロ創設の精神と性質

組織

下ボラボロの地方支部、農村下ボラボロ

藝術教育及民衆教化

演劇部門、野外演劇、歌劇的、音樂運動、唱歌隊學校、樂隊、競走、一九三七年統計報告、映畫、ラヂオ

第一章 國土計畫の最終課題たる「生活計畫」について

料金の遞減、一般教化、短篇競争、圖書館、一九三七年統計報告、民衆の慣例、牧羊業の工藝展覽會及労働器具の裝飾、歌、音楽及ダンス、ドボラポロに於ける傳説、唱歌隊及舞踏隊、聲樂競争、民衆祭、特
有な水祭、五月祭、及歌祭り、國民ダンス、結論

體 育

體育、綱引、球戯、野球及庭球、漕艇、體力證明、長距離レース、國民競争、一九三七年度體育運動關係統計、ドボラポロ競技、G・O・N・I と協同の運動競技、遠足、一九三七年遠足統計、結論

社會公益及保健計畫

公益、公益事業の諸種の型、諸集會及閑暇時間の保險額遞減及割引、防空、保健事業、家庭及家庭菜園の問題、一九三七年度公益事業關係統計、出版圖書

E、大衆慰樂内容の參考として古來の隣保的市民生活をあげれば左の如し(著者説)

古代、中世等の西歐都市

廣場、市場、教會、祭り、等

現代外國都市

喫茶店、クラブ、劇場、隣保館(アメリカ)等

江戸時代

祭り、盛場、縁日、遊廓、相撲、遊山、劇場、等

支 那

祭り、廟、茶館、劇場、等

F、商業中心と慰樂性の關係(デボアの著書より)

× 嘗ての市場廣場は今日のビジネス區域である。

× 市民は群集に魅かれる。

× であるからビジネス區域の第一の仕事は社會的な集會所とする事である。

× 昔しの市場廣場は今日の商店街よりはるかに盛り場であつた。

× 群集に會ひ度い慾望、美しい店を見度い氣持、陳列、建築物と云ふものが客を集める。

G、學生娛樂問題に關する調査（大原社會問題研究所）

要望されたる公的施設

- 一、娛樂的催物の公的開催
 - 二、學藝講演會の開催
 - 三、劇場、映畫館、音樂會等に學生日を特設せしめる事
 - 四、學生専門の映畫館、音樂會館の建設
 - 五、學生旅行の爲汽車、汽船賃の免除又は大割引
 - 六、圖書館の設置及普及
 - 1、大規模の圖書館を市中央部に建設する事
 - 2、簡易圖書館の増設普及
 - 七、スポーツ設備の公的施設
 - 八、純潔なる青年男女社交俱樂部の建設
 - 九、學生會館の建設
- 學校施設への要望

學生生活を樂しめる設備

- 1、適當なる娛樂趣味機關の設備
 - 2、圖書雜誌閱覽室、控室、喫茶室、談話室、娛樂室等の設置
 - 3、校内に學生クラブの設置
 - 4、校内に運動場、遊歩場、ベンチ等の設置
 - 5、スポーツ、旅行、ハイキングに關する團體の獎勵及び助成
 - 6、簡易にして清潔なる食堂の設備
 - 7、湯茶、菓子等の供給に對する特別の配慮
- 學生娛樂に對する積極的施設
- 1、名映畫、高級レコードの鑑賞會開催
 - 2、スポーツ、觀覽の獎勵とその施設
 - 3、學生自治團體の獎勵及助成

五、映畫利用率調査(都市年鑑より)

都 級	演 劇		リ入場頻度		リ館數		リ入場頻度	
	一〇萬人當 リ劇場數	一四年	一〇萬人當 リ入場頻度	一四年	一〇萬人當 リ館數	一四年	一〇萬人當 リ入場頻度	一四年
六大都市	〇・九	〇・六	二・二	一・一	三・六	三・九	七・〇	一三・九
二〇萬以上	一・六	一・二	〇・九	〇・七	三・三	三・五	五・五	七・八
一〇萬以上	二・五	二・三	一・三	〇・九	四・二	四・六	六・四	八・八
五萬以上	四・一	四・九	一・九	〇・九	五・〇	六・四	六・二	五・八
五萬以下	四・七	七・〇	二・六	一・三	七・一	五・〇	六・三	七・五
全國平均	二・七	三・二	一・八	一・〇	四・六	四・七	六・三	八・七
伯 林					九・〇			
ブレイメン					八・〇			

1、上海の娛樂場の種類及數(著者調)

正當のもの	戲 場	京 戲	地 方 戲	票 房	話 戲 場	間 場	電 映 場	綜 合 娛 樂 場	遊 戲 場	玉 突	射 的	ダンスホール	ナイトクラブ	キャバレー
	三	二〇	二九	一	二二	四五	八	一三(三二)	三九					

第一章 国土計畫の最終課題たる「生活計畫」について

クラブ(總會) 五二

茶館 五四〇

茶館 一

酒店 一、九九二

スポーツランド

スケートリンク

プール

ゴルフ

特異のもの

純賭博

ハイアライ

競馬

競犬

麻雀

1 1 3 1

J、企業性娛樂(抄)

The City-Smart Alfred Queen

小都市には未だ精神映畫以外の企業性娛樂はない。

然るに大都市に於てはあらゆる種類のものがある。

Legitimate Vaudeville, burlesque 及映畫

娛樂園、カンサス市の Play-Mor の様な大娛樂中心、舞踏場、Cabarets 巡遊船、玉突、水泳場、

スケート場、職業運動の觀物場、競技場、等々。

それ等は純粹に見物向きである事もあれば賭博の對象になつてゐる事もある。

X

最近の企業性娛樂の王座は何と云つても映畫であるが、それに次ぐものはダンスホールである。

ダンスホールの中 Dance Palace は最豪華なもので特定のものしか入場出来ない。

それはダンスよりも社交が主だと云つてよい。

又、Dance Pavilion は多く都市の周邊で行はれるものであるが時には、娛樂場のアットラクションとな

つて出る事もある。

巡遊船や料理屋やホテル等でダンスが行はれる事もある。

Dancing Academies といふやうな少数高級なものか ballroom ダンスを味ふ事もある。

然し、その中で最も多いのは矢つ張り Taxi-dance ホールであるが、この女達は元來が家庭や、仕事等に失敗してなだれ込んだ連中であり、まひには又こゝから下級の Cabaret に下つてゆく道程のものである。又こうしたダンスホールに感溺する男はヒリツピン人や支那人等と云ふ他に社交的な場所を求め難い連中移民や五十近い老人で、ヤモメになつたもの、結婚が思はしくなかつた青年、孤獨な旅人、Worthless-trotter, Slammer, 等であり、先づハンテキヤツプのついた連中が性のたわむれに群れて來てる。

その他 Cabarets, Night clubs, Road house 等にもダンスはあるが、質は下り一方に Road house に致しては犯罪性を帯び都市の警察團の外へへと逃げて行く。

x

過去半世紀で企業性娛樂が非常に増へた、之は段々地方へ分散してゆく傾向がある。

x

娛樂の都市内に於ける分布。

下町 劇場、玉染、タキシ、ダンスホール

都心 大映畫館、ダンスホール、玉染 bowling alleys, social settlement 青年クラブ (YMCA 等)

山の手 少年團、婦人クラブ、近隣映畫館

市外 コルフ、Road house 娛樂園、競技場

公園や、運動場は全市的に擴がつてゐる。

K、文化政策論 (近藤春雄氏)

取り扱ひ題目

一、國民演劇の創生

演劇 巡回演劇、移動演劇、野外劇場

舞踊 總親和形態の演劇

二、映畫藝術の高揚

三、國民構成と文化統制

x

具象的なとして協同體精神を基調とする特別な慰安施設を提供して、その精神生活を醇化潤澤にし、不純な不健全な享樂面の吸収力を終熄させて了ふ。

x

所謂商業主義的企業形態による演劇映畫の興行性が勢ひ、その利潤獲得の目安を消費面の多寡により決定する結果都會集中主義を辿らざるを得ないのは當然の現象であつて、國民文化の醇化と向上に就て、當局自體が如何に無方針であり、これ等商業主義を放任したその惡果に注意を拂つて居なかつたかゞ遺憾ながら立證出来るのである。

×

かうした文化の國民層への開放運動に積極的協力を期待し得る集團として現存の青少年層を中心とする各種團體の動員を考へる。

×

農村演劇とは決して、都會的演劇の亞流であつてはならない。

土から生れ農村人士によつて創られ演技され鑑賞されてこそ云々。

×

青年團の喇叭鼓隊の編成も、單にそれが團と團員のみのためであるならば、尙、獨善孤立の誹りを免れない、……更に進んで、農村や市町の一般住民の夕べを慰むる手段として健康なる音楽と明朗なる唱和を送るならば明日の勤勞の新しい源泉として云々。(資料の項終り)

此等の中第五系のもは少くも日本内地に於ては用ふ可からざるものに屬する。

その他の内容は總て重要であるが、たゞ日本今日としてはいずれにせよ、「保健」「隣保」「國民心」を主題とする内容及それに對する施設を第一位とす可きである様に思へる。

又、これ等の質的分類とならんで、規模的分類があり得る。それはこれ等の施設に高度なものとの低度なものとの存在し、民衆は日常に於いては低度な規模に満足し、間歌的に高度なものを求めるからである。而して、これは概ね民衆の生活の段階に應じて行はれる。

例へば、我々の生活が大體に於て、

日 常 生 活
週 末 生 活
月 末 生 活
季 末 生 活

等に分けられるとすればこれ等の施設も亦此の規模に應じ分類されることになるのである。

第三節 環 境 論

かくして、これ等の諸内容が環境に對し求める所を吟味するのであるが、此をその一つ

について行ふ煩瑣をさけて、こゝでは便宜上これ等の生活が更に次の四つに類別され得ると考へる事にする。即ち

- 教 養
- 朗 生 (慰樂生活を積極的に考へて)
- 保 健
- 隣 保 (或は社會的満足)

これ等の夫々が、その聚落的環境に對し如何なる條件を要求するか、これを土地秩序の角度より吟味して見る。

(イ) 保健生活

保健生活の要求する環境は云ふ迄もなく、清淨なる大氣、充分なる日光、廣濶なる空地であらう。

これ等を與へる聚落形態は、云ふ迄もなく小聚落性のものである。

大都市の形態は此の點では絶対に拒否される。

紫外線、空中塵、交通機關の排氣、騒音等如何としてもさげ難き惡條件が集積してゐるから

である。

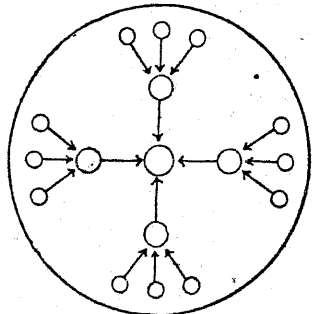
その結果、一九〇〇年來の都市計畫は大體この點に終始し、先づ人口五萬の田園都市論を出し、最近には獨逸のフェーダアが人口二萬の理想都市をあげて居る。

(ロ) 隣保生活

隣保生活についてもギリシヤ以來小聚落が行はれて居る。

プラトンが「都市の大きさは市民が相互に顔を見識り合へる程度を理想とする」と云つたのは常に正しい。

少くも今日の大都市の如く、近隣相互の職場を知らず、從つて相互に何等依存關係なく且つ意識し得る集團的限界がない場合、市民相互の感情にはいさゝかの温きものをも期待出來な



かくして、我々は、單位としての結び合ひを有たずして、何で全體の結合歸一を企圖する事が出來よう。若しそこに何等か精神的結合ありとするも、それは觀念の外の何ものでもあり得な

たゞ、これが保健の如き性質のものとは異なるは、その單位として望まれるものが小聚落であるとしても結局に於て人類はあく迄人類全體と結合する事を欲求してゐる事である。

而して、それが國家の程度に於て一と先づ一段落をつける事が世界を通じての要請である。

即ち、この場合、夫々の單位が小聚落であるとしても、その小聚落は又大きく結成されて第二第三の中心を結び、國家に迄統合される必要がある。

(これを假りに積分構成と名づけ得る)

(ハ) 朗生及教養生活

以上二つの生活は、夫々明快な條件を要求してゐるが、朗生及教養は聚落的な環境については、餘り明なものを求めて居ない。

たゞ朗生は自から隣保と通じ、教養は保健と同じ様な要求を有つてゐる様に思へる。

即ち朗生は過剰なる人口の集結を求めないが、然しさりとして、稀少なる人口に満足する事は出來ない。

又、教養生活はひたすら安靜なる環境を求めてゐる。これは小聚落の中に於て最本質的なものを與へられ得るかも知れない。

以上を通じて求められる條件は、大體に於て

小聚樂なると共にその積極的構成

とでも云ふ可きであるが、此の他に聚落内部に於ては大體に於て夫々の生活專一なる事、安靜なる事等

が必要とされる。

この爲には騒音及通過交通等が拒否される事云ふ迄もない。

又廣場、等を與ふる事により環境條件が完成されるものである事も田園都市論者乃至ナチスの都市計畫家達が説く如くである。

「獨逸のジードルング」は次の様な事をのべて居る。

現代の交通機關は農村廣場、小都市の市場廣場から、そこに住む人達の社交集會場と云ふ意味を奪つた。嘗て、慰樂、討議、雜誌、子供の遊戯等の場所であつた所は、今日では騒音塵埃、生命の危険の場所である。

村落及小都市の住民の憎惡は、大砲の通過より寧ろかゝる重大なる公共社會の破壊にある

と云ふことも出来るのではないか。

新ジードルングに於ける廣場の形態については藝術的形態に對する原則は教へる事も規定する事も出来ないが、その外に尙次の見地より最大の考慮が拂はれねばならぬ。

先づ廣場が交通廣場として價值あるものであるか、若くは住民の生活に對する廣場として價值あるものを明にし確定せねばならぬ。

道路は次の様に區別される「通過交通用道路」「間地交通用道路」「住宅用道路」

通過交通道路は交通上の原理によつて設けられるもので、一方に於て、通過交通が成る可く障害を受けざる様、且ジードルングに迷惑を及ぼす事なき様配す可きものであり、他方ジードルングと外界との連絡をとる可きものである。(獨逸のジードルング終り)

第四節 人口の社會構成

さて、以上の如き「生活自體」を支持するのも人口であり、これを受容するのも人口である。

人口の量は高度にして豊かなる生活を育生すると共に、人口の質は生活の質を高める作用を

有つ。

又逆に生活の中の文化自體が生活を深めてゆく事は云ふをまたない。即ち、これは相互に作用し合ひつゝ深めゆく働きを有つものであるが、然しいづれにせよこの際根基を爲すは人口の構成する「社會」である。

而してその「社會」は實に生活に於ける隣保生活がその單位となり隣保の精神が發展してそ

の「社會心」となる。

構成

即ち先づ我々は最も望まじき形態としての居住聚落を構生する必要がある。

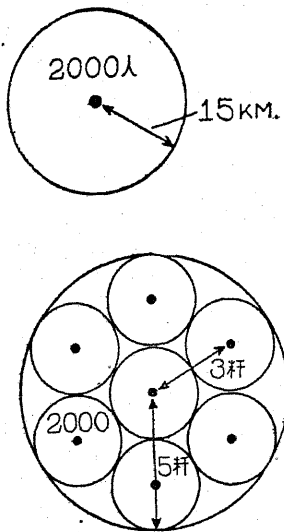
而してそれはその最初に於いて農地面積に
より決定せられる。

即ち先づ農耕半徑を一、五軒とすれば、耕

地各戸宛一町歩半として四百戸、二千人の聚落が出来る。

次にこの農村聚落の一群は、その中心約五軒の所に日常中心を抱く事になる、この中心人口

第一章 國土計畫の最終課題たる「生活計畫」について



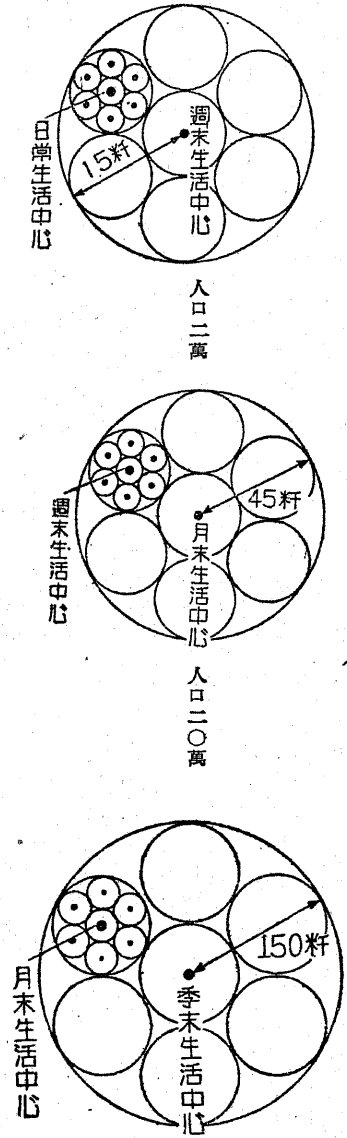
二萬とする(中二、〇〇〇はやはり農業人口)これはフューダーの考へる最適の都市人口である。續いてこれ等の日常生活中心が更に週末中心を抱く、これは通勤半徑より推定する、更に週末中心の中央に、月末中心が出来る、この半徑三〇—五〇軒であるが、これは中心都市影響圏の最大なものとして知られてる。

而して、これが一先の實際上の生活圏の最大限度であるが、更に強大なる都市を育成し得る場合には、この他に又季末生活中心として、巨大都市を有つ事になる、この半徑は恐らく人口移動圏よりして一五〇軒内外なる事を知る事が出来る。この場合の總中心人口は、五〇萬人以上となり得るであらう。

(これ等の人口計算は更に精細なるを要する)

かくして我々は、こゝに層々として築かれ行く聚落の構成する地方社會を得るのであるが斯くの如く、構成される社會が、即ち人類の希望する典型的なそれであるように思へる。即ちこの形に於いて我々は聚落内の隣人を明確に意識し、(そのような聚落は最大を二〇萬人とする事はソ聯の規定する所である)更に農業地帯によつて他と隔絶される事により益々血縁意識を深くする。

しかもそれは組織により明快に國家の大と血縁的密着を感得せしめる。



此は何としても人類の「最幸福」であり「最強大」であり得る形態である。

その醸成する効果は當然、人口の數學的な和に比して化學的に大なるものでなければならな

5。たゞかゝる際に重要なのは、

結集せる施設の社會價值がその地方人口重心に近づく程重要なものである様な配置である事及びそれに對する紐帶としての交通機關が整備されて居る事である。

但しその整備度合はあく迄日常を最大とし季末を最小とするものでなければならぬ。

備考 農村聚落の中へ文化を分與する事については池田善長氏は

「農村に於ては生計狀況、換言すれば經濟的要件のみか其生活内容を支配的に規定するに比して更にその一要件として地方的中心地又は地方的文化中心地への距離的關係が多分に經濟的要件による規定を制約乃至阻止するの傾向があると斷じ得る。」とのべてゐる。農村社會生活の實態調査（日本社會學年報第三輯）

基礎條件

以上は人口の相互關係的社會構成であるが、これを完成せしめる基礎條件は、何としても各人口をして土地及び家屋をその土地に於て所有せしめる事、及びその土地家屋が永年居住の條件を具備してゐる事である。

この點に關しては、ナチスの採つた方法論は全く正しいと考へられる。

第五節 人口構成と生活構成の複合

さて、以上の如き人口構成となつた時人類は最強大にして最聰明となり得るのであるが、かかる時の生活配分は如何に行はれるであらうか。云ふ迄もなく小聚落であり積分構成なるが故

に、總ての生活環境は満足される。而して問題は施設であるが、これは云ふ迄もなく支持人口の累積により重心に近づく程高度且つ豊かになる。

これは社會結成を有效ならしめると共に、地方分權を可能ならしめる。

而して人口集結圏が小さくなるに従ひ、支持人口も減じ自から規模の小なる施設を分派する形を採る。

それは、結局、季末、月末、週末、週末、日常の級に従ひ、季末より日常に向ひ、放射的に擴がる形を採る。

これは人口が、あたかも周邊聚落より發して大集しつゝ中心を抱く形と相補足し、完全なる一體を成す如き外觀を與へる。

かく二つのものが、一體を形成する時、社會化された人類は、その社會構成的効果により、生活を支持し質を上等ならしめる。

又生活はその働きを交流して社會を向上せしめる。この形は地方構成の最上のものと云はざるを得なう。

第六節 二、三の吟味

かくして提示されたる此の案は、尙二三の吟味を残して居る。
大都市構造に對して

その第一はかくの如き結果は現代大都市の構成をそのまゝにては果し得ざるか——と云ふ事であるが、これは、否である事云ふ迄もなす。

先づ、現代都市は、環境條件の一切を失つて居る。

又施設としては、人口結成が自由放任である爲、一つの施設は支持人口を確保し得ない。

従つて、中心施設は最高度なものを得易く、此の點、此の案の示すものより利であるが、その二次三次的な局所的なものを育生する事が出来ない。

又、此の自己の存在を失ひ、全體結合の途を認識する事の出来ない人口は、虚無的になつてゐる。

この虚無人口の構成する全體の社會的結果は頽廢的なものでなければならぬ、従つてその育生生活——特に文化は健全であり得ようはずがない。

従つてその交互作用は國家を決して幸福に導かない。

食糧自給の計算

一つの地方が食糧の自給性を有たなければならぬと云ふ事は、今日の國土計畫の通則となつてゐると云つてよす。

縣名	總人口	都市人口	農業人口	全面積	都市面積	(作付面積)	收石高
埼玉	萬人	萬人	萬人	萬町歩	萬町歩	(農業面積) 萬町歩	萬石
群馬	一五三	一七	四三	三八	〇、七二	(一七)(一四)	二九一
群馬	一二五	二三	三一	五七	〇、五三	(一二)(九五)	一九一
岐阜	一二八	一七	七〇	五六	〇、〇五	(一二)(九)	一五〇
標準化(埼玉を標準とす)							
規畫	—	二五〇	七〇	六〇	—	—	二七
埼玉	一五三	—	四三	三八	—	—	二九一
群馬	一二五	—	三一	五七	—	—	一九一
岐阜	一二八	—	七〇	五六	—	—	一五〇

(統計は總て昭和十二年度以前)

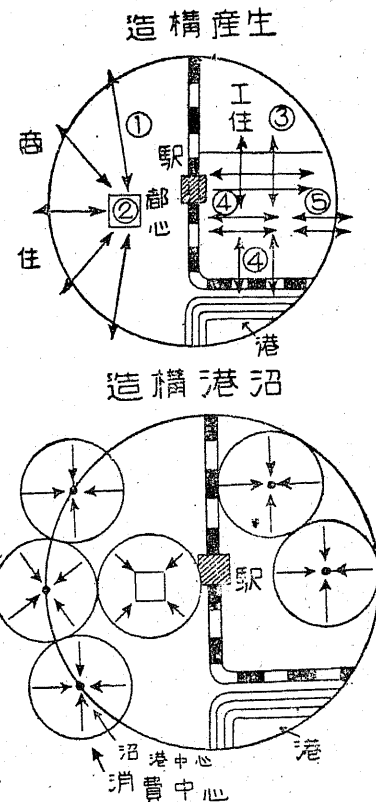
而して、それは規畫計畫的な計算でゆけば、上述の案でそれが可能なのである。

自分はそれを群馬、埼玉、岐阜等の縣の實狀と比較吟味し、大差なきを見出したのである。

参考

以上の参考として左の二論を添へる。

大都市の生産消費兩生活の構造



現代大都市は生産消費の二重の構造を有つてゐる。而して、その機構となるのは勿論生産である。

生産は更に工業及商事の二つに分かれその事は又次の様な働きを藏してゐる。

- 商事 通勤(1) 相互關係(2)
- 工業 通勤(3) 運轉中心との關係(4) 相互關係(5)

これが現代都市の機構であるが、現代大都市の玄妙さは、更に此の上に徒歩を主とし通勤交通機關を補助として、全然別系統の消費組織を成立せしめてゐる事である。

此の夫々の中心は、盛り場と稱する區域でありそれは商店街を主體とし大體長さ七、八町、これは晝間は買ひもの中心、夜間は市民クラブ的使用されて居る。

此の中の大きなものは娛樂中心を有する。

此の娛樂中心は映畫館を主體とし、商店街と丁字構を成してゐる。

かくの如き中心を核とし、半徑一軒内外の地域が集結されてゐる。

此の人口大凡一〇—五萬人であるが、此の状はまことにギリシヤ以來中世に到る都市人が、徒歩半徑の都市を造り、その中心に市民廣場を設け朝夕そこに會し、時に市を開き時に宗教上の催事等をなしつつ、愉快なる市民生活を營んだそれに酷似して居る。

現代大都市はかゝる中心を全市に一つ設ければ足る如く見ゆるにかゝらず尙舊の如く、徒歩半徑の集團の價値を墨守し、その夫々に中心を設け、それ等を併せて初めて聯合市を構成せんとして居る。此の點誠に興味深い。

特に興味あるは、かゝる際全市の中心の地價は、かく中心分裂せざる一〇萬人以下の小都市

中心地價に比し、はるかに割安なる事である。

中心地々價、人口一人當り(厘)

東京	〇・六
大阪	一・三
名古屋	一・八
京都	二・八
神戸	一・七
横浜	一・一
上田	五・七
酒田	六・三
敦賀	三・二
栃木	八・六
高田	三・二
中津	九・九

これは大都市の中心が決して完全なる全市中心でない事を立證してゐるのである。

かくして、此の現代大都市の構造に於て「消費生活」が、強大なる生産構造の上なるにもか

はらず、平然と都市發達史以來の独自の形式を守る事を見出し驚嘆すると共に、これをそのまゝ活かし、更に失へるものを回復せしめんとするのが、前説地方圏の構造であると云ふ事が云へるのではないであらうか。

まことに此の夫々の中心を一〇軒、三〇軒と離し、その間に農耕地帯を存せしめれば、そのまゝ「地方圏」が顯出するのである。

大都市の地方都市存立に及ぼす影響

大都市がいかに地方都市の後背地をうばひ、これを窮乏せしめつゝあるかを、我々は二三の實例によつて知る事が出来る。

その一つを、自分は所謂大都市圏の存在によつて示し得る。

即大阪、名古屋、東京の如き強大なる都市は、その周圍に自己の力に應じ、都市圏を造る。

例へば、東京は横濱、川崎の如き準、東京都市は別とし、七里圏内には實にしばらく「市」を育生せしめなかつた。

而うしてその影は遠く一〇〇軒に及び、そこに至つて初めて水戸、宇都宮、前橋、高崎、甲府、沼津等の地方首府級の都市の存在を許してゐる。名古屋、大阪も同様の美しき圏を有してゐる。

これは明にその都市自體の人口に力を及ぼせしのみならず、その周圍の下位都市を吸引した結果である。

地名	一五軒園	三〇軒園	六〇軒園	八〇軒園	一〇〇軒園
關東平野 中心都市 東京六六七	市川川口 川崎 二六五 二三	横濱 千葉 大宮 浦和 五八九 五	熊谷 土浦 川越 八王子 七四四 七		水戸 宇都宮 桐生 足利 高崎 前橋 甲府 沼津 一〇九七 一〇九五 一〇七五 一一九五
攝津平野 中心都市 大阪三四五	西宮 堺 尼崎 一一一 一八 一六	神戸 奈良 岸和田 一〇二 六 五	明石 和歌山 大津 京都 二〇五 二〇 一八 一九	姫路 津 一一七	
濃尾平野 中心都市 名古屋一二七	瀬戸 一宮 桑名 六六六 四	岐阜 大垣 岡崎 一四 六 六	豊橋 津 一四七	宇治山田 五	濱松 一八

數字は人口萬單位